百部など云、略これらの都良を、加豆良乃思ふは本末たがへり、忍冬も字鏡には須比豆良とあり、拾遺集雜下に、さだめなくなる瓜のつら見てもとよめるは、蔓に頻を云かけたるなり、今都留と云は、都良のうつれるなり、弓の弦をも、万葉に都良ともよめり、馬具の轡鞦頭の都良もよめり、轡は手綱のことなり、草の蔓よりぞ出けむ、さて何にまれ蔓草を以て頭の飾にかくるを、髪葛と云、是卽鬘なり、さて然鬘に用るから、立かへりて草の葛をも加豆良とは云ならむ、又髪も髪を飾具なれば、鬘とおなじ名を負せつらむ、さて鬘は、上代には女男ともに懸る物にて、蔓草を用ひしをば、石屋戸の段に眞拆をかけしを始て、日影鬘など、又必しも蔓ならねど、花蔓菖蒲鬘木綿鬘などあり、これらも加豆良と云名は、蔓草より出たるなり、又絲などを以ても作りしにや、珠をかざること、天照大御神の御飾の所に見えたり、玉鬘と云は是なり、髪にも葛にも玉かづらと云は、此の玉鬘の名をうつして呼か、又たゞほめていふもあるべし、穴穂宮御段に、押木玉縵と云も有て、貴き寶なりしこと見ゆ、万葉に波禰蘰と云こともあり、蘰字は、此物草にても糸にても造るゆゑに、設けたる字にや、しかも此方にて作れる字多し、縵も本の字義にはかゝはらで、右の意もて用るなるべし、和名抄に、花蔓を伽藍具に載たれども、これももと天竺の人の頭のかざりなり、さて此に黑とあるは、色以て云なるべけれど、何物にて何如作れりとも知がたし、都豆良を黑葛とかけども、そは此に由なし、此黑字久漏伎と訓はわろし、殊に其色をことわらむこと、こゝに用なく聞ゆれば、なり、さればクロミカヅラと訓べし、其久漏も色もて云にはあれど、如此よむときは、鬘の一種の稱となりて、古言の例にかなへば、蒲子の成れるに就て思へば、此鬘のさま、蒲葡葛に似て、玉を垂たるが、彼實のなれる形にや似たりけん、色の黑かりけんも、彼實によしあるにや、

〔延喜式七 踐祚大嘗祭〕卯日平明、神祇官班幣帛於諸神、略中○同剋時○巳兩國供物發自齋場向大嘗宮、中○略次造酒兒、細布明衣日蔭鬘、乘素輿、輿夫四人、次御稻輿、納稻布袋、擔夫二人、稻實公、青揩衣木綿襷、日蔭鬘、次戴御膳案女八人、細布彩木綿襷、日蔭鬘垂○髻、

〔空穗物語 祭の使〕色々の御ぞ共いろをつくし、ときほとき、おほいかをならべ、御てうどいろをつくし、なほと、のへ、御かづらどもたけをと、のへ、かずをつくして、かたゞさらされたり、風にきおひて、ものゝかどもふきくはへぬ、